

東先生のボランティア活動報告

この春定年退職された東達男先生（社会科）が、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市でボランティア活動をなさいました。2年生は5月30日の「総合的な学習」の時間にお話を聴く機会に恵まれましたが、全校の皆さんにもぜひ知ってもらいたいと思い、東先生をお願いしてレポートを書いて頂きました。東先生の眼からご覧になった“被災地の今”はどんなふうだったのでしょうか。

ボランティア活動の報告

元勝山中学校教職員

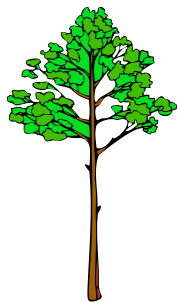
東達男

3月末に退職して、4月9日～5月15日と6月12日～6月23日の間に、岩手県の陸前高田市にボランティアに行ってきました。京都縦貫道以外は、一度も高速道路を走ったことがないなかで、同僚だった井上先生が1週間行ってくれるというので、非常に心強かったです。京都から、陸前高田まで、約1千kmの距離、新潟で1泊して、翌日の午後3時過ぎに着きました。陸前高田に入ると、カーナビどおりにいかなくなる。市役所に行こうにも、市役所は被災し、仮設で場所が移動している。ナビにしめす建物や、線路や踏切がなくなっている。ようやく仮設の市役所に着き、菱井先生から、昨年旧1年4組のクラスが文化祭で取り組んだ「希望の一本松」の資料を教育委員会に届け、地元の中学生に回覧してもらおうという約束をもらいました。市役所をあとにして、今日から宿泊する住田基地に向かいました。住田基地は10年前に廃校になった小学校が、地区公民館として利用されていて、今回の震災で隣町



の住田町がボランティアのために、無料で施設を提供してくれました。自炊もでき、風呂もあり、洗濯機や乾燥機まであり、非常に居心地の良いところでした。住田基地には北は北海道から南は九州まで全国から集まっていました。老若男女、上は75歳の元大工の棟梁から大学を休学して、自転車で全国一周をめざしながら、陸前高田に立ち寄り、2週間ボランティアをして、北海道に向かった青年。様々な人々が陸前高田にやってきました。初めて出会ったボラ

ンティアの人たちと、初めて交わす会話は、「どちらから来られましたか」からはじまります。一日でも、ともに活動していくともう何年も付き合っていたかのように、仲良くなります。共通の思いでやって来たことがそんな気持ちにさせるのかもしれませんが。ボランティア活動の内容は、おもに 道路の側溝の泥だしや、畑や、流された宅地跡の瓦礫の撤去でした。昨年3月11日のままの状態の側溝にたまった泥の中から、当時使われていた生活用品が一緒になって出てきました。なかには、カメラや灯りのついた懐中電灯もでてきました。一瞬にして、市の人口の一割の命を奪った大津波のあとは、1年3ヶ月たった今でも、あちこちにとどめています。ダンブカーや重機がひっきりなしに、動いています。うずたかく山のように積もった瓦礫がいたるところで見られます。しかし、確実に復興に向けて少しずつ進み出していることも事実です。仮設の店舗も少しずつ造られています。被災した多くの人は仮設住宅で暮らしていますが、あの7万本ちかくあった高田松原で、唯一残った「奇跡の一本松」も永久保存が決まったそうです。また市役所などがあった街の中心部を、メモリアル記念公園にしていこうとする要望を、国にあげているという計画もあるそうです。まだまだ復興には5年、10年という年月がかかるかもしれません。復興した高田の街をみたいと思います。



後半の6月12日からのボランティア活動は、海岸線の近くの流失した家のあとに、地元の方やボランティアの人たちが、雨をよけたり、日除けのために立ち寄れる、東屋づくりに専念していました。まだ未完成で京都に戻ることになりましたが、7月初めには出来上がっていることと思います。最後に被災した陸前高田を記録した写真集の表紙の裏にこんな文が載っていました。紹介してボランティア活動の報告にしたいと思います。

おらあやっぱりここがいい
大津波で全部なくなっても
地震でぼっこっさされても
やっぱりこの街が好きだ
やっぱここに居たい
ここあ一番だ
二度と同じけしぎあ見れねあども
二度と同じ建物あただねあべども
おらどの目にあしっかり焼きついでいる
わっせるごどねあ あの色
おらどの街
やっぱりここがいい